SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

国語科授業案

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-08-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 康弘 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/00026732

国語科授業案

授業者　鈴木　康弘

１　日　時　　平成30年６月14日(木)　第４時
２　学　級　　１年Ａ組　（１年Ａ組教室）
３　題材名　　「河童と蛙」
　　―群読台本作成を通して詩の解釈を深める―

４　題材の目標

詩集『のはらうた』の世界を音読で表現した子どもたちが，草野心平の「河童と蛙」の登場人物の描写や場面の展開，表現の特徴に着目しながら群読台本を作成することを通して，この詩の世界に対する解釈を深めることができる。

５　題材観

(1) 草野心平と表現

本校の校歌の作詞者である草野心平の表現について，一緒に「草野心平の校歌展」を訪れた，同じ【ＪＡＳ】のメンバーである井出氏とカジ氏は，次のように考察しています。

> **独特なフレーズは草野作品に共通している**
>
> 「日輪　天にあまねし　朋がら　眉あげて　秋は紅　春はむらさき　へめぐる」といった本校歌詞に独特な印象をもたらすフレーズは，他校の歌詞にも散見され，草野氏独特な表現であることが分かります。
>
> **「自然」と「人間（子ども）」との対比**
>
> 「へめぐるは四季の生命」などで自然の悠久を表していそうです。子どもたちにとって，この学校での生活は一度しかないというメッセージでしょうか。なぜなら，「は」という副助詞で生命の巡りを強調し，後の行で「われら」と並べて示しているからです。さらに，一番では「朋がら」だったのが二連では「若人」と示していることからもわかるでしょう。

井出氏が述べているように，本校の校歌に綴られた言葉を見ても，独特な表現の一面を垣間見ることができます。またカジ氏の考察から，自然の描写と人間の営みとのつながりが見いだされています。

草野心平は貧困の中，新聞記者，屋台の焼き鳥屋，出版社の校正係などの職に就きながら，30回以上の引っ越しを繰り返しました。明日の食べ物のあてもないという貧困ぶりでした。戦後，貸本屋「天山」や，居酒屋「火の車」，その後バア「学校」などを開いていますが，これらのネーミングからは，貧困の中でもユーモアを忘れない，たくましさが感じられます。

また，草野心平は蛙や鯉，草魚（そうぎょ）や鰻などの生物たち，さらには石ころにまで名前を付けていました。そこには，草野心平が言葉で表現することに対して真剣に向き合う姿勢が表れています。1954年に発行された『詩と詩人』の「私の詩作について」のなかで，

> 素材としての対象に私はきくことにしている。これらの言葉でいいのかと。君の存在はこれらの言葉によって適確に表現されたかと。君であり同時に私であるその存在が頭を横に振ったなら，私は言葉の追求を継続する。私は再びその対象の中にもぐりこんで最後の言葉を掴もうとする。

と述べています。

弱い生物たちに草野心平は心を傾け，対等の存在になろうと生物たちに命名したのかもしれません。さらに，そうした生物たちに言語を与え，私たちにとって何気なく過ぎていく，生物たちの生や死にさえ意味を見いだし，リアリティーを追求していったのでしょう。

(2) 草野心平と蛙

草野心平にとって，「第百階級」という蛙の詩だけを集めた本が最初の活版印刷詩集であり，また，一連の蛙に関する詩により第一回読売文学賞を受賞するなどまさに「蛙の詩人」と呼ばれるにふさわしい詩人です。

この「第百階級」には，高村光太郎が序文を書いていますが，そのなかで，草野心平を，

「彼は蛙でもある。蛙は彼でもある。しかし又そのどちらでもない。それになり切る程通俗ではない。又なり切らない程疎懶（そらん）ではない。真実はもっ

とはなれたところに炯々（けいけい）として立っている。」 と紹介しています。

その言葉の通り，草野心平は「ごびらっふの独白」という蛙語で書かれた詩を発表しています。

ごびらっふの独白

るてえる　びる　もれとりり　がいく。
ぐう　であとびん　むはありんく　るてえる。
けえる　さみんだ　げらげれんで。
くろおむ　てやあら　ろん　るるむ
かみ　う　りりうむ。
なみかんた　りんり。
なみかんたい　りんり　もろうふ　ける
げんけ　しらすてえる。
けるぱ　うりりる　うりりる　びる
るてえる。
きり　ろうふ　ぷりりん　びる　けんせりあ。
以下省略

心平が生涯かけて書き残したとされる1400ぐらいある詩編のうち，約230編が蛙を主題としています。草野心平は18歳で中国に渡り，兄の影響を受けて詩を書き始めます。そこで聞いた蛙の声がふるさとを思い起こさせたという話があります。「蛙は最下層の階級かもしれないが，生きるエネルギーにあふれている」そんな思いがあったそうです。

このように，蛙に自分の思いを託すだけでなく，蛙の生き様と同化し，自然や小さな生物などのかけがえのない生命のはかなさや力強さと共生する，自然界の営みを感じさせる作品が多いことが，草野心平の詩の特徴としてあげられます。

このような草野心平の詩の特徴は，本題材である「河童と蛙」にも表れています。

(3) 「河童と蛙」の世界

るんるん　るるんぶ　るるんぶ　るるん
つんつん　つるんぶ　つるんぶ　つるん

河童の皿を月すべり。
じゃぶじゃぶ水をじゃぶつかせ。
かおだけ出して。
踊ってる。

るんるん　るるんぶ　るるんぶ　るるん
つんつん　つるんぶ　つるんぶ　つるん

大河童沼のぐるりの山は。
ぐるりの山は息をのみ。
あしだの手だのふりまわし。
月もじゃぼじゃぼ沸いている。

るんるん　るるんぶ　るるんぶ　るるん
つんつん　つるんぶ　つるんぶ　つるん

立った。立った。水の上。
河童がいきなりぶるるっとたち。
天のあたりをねめまわし。
それから。そのまま。

るんるん　るるんぶ　るるんぶ　るるん
つんつん　つるんぶ　つるんぶ　つるん

もうその唄もきこえない。
沼の底から泡がいくつかあがってきた。
兎と杵の休火山などもはっきり映し。
月だけひとり。
動かない。

ぐぶうと一声。
蛙がないた。

本題材である「河童と蛙」という詩は，擬態語や擬声語だと考えられますが，一般的なオノマトペとは違った，草野心平独特の表現から始まります。「るんるん　るるんぶ　るるんぶ　るるん　つんつん　つるんぶつるんぶつるん」この表現を子どもたちはどのように解釈するでしょうか。そして，どのように音読するのでしょうか。きっと，その際には河童や他の登場人物たちに注目するでしょう。

この作品の登場人物は，

① 河童
② 大河童沼のぐるりの山
③ 月
④ 蛙

の４人だけです。ここで４人としたのは，それぞれが擬人化されたものとして表現されているからです。その擬人化された登場人物たちの静と動が，時間軸に沿って変化していきます。

① 河童の皿に映る月が揺れ動くほど，河童は水面から顔だけ出して，はしゃいでいる様子

② 大河童沼を囲む山は，そうした河童の様子に驚き，呼吸をするのも忘れている様子。そうした周囲の状況にも目をくれず，全身（足や手）を使ってはしゃぐ河童。その激し

さは，水面に映った月が，煮えたぎった熱湯のように沸いているという表現から分かる

③　水中にいたはずの河童は，水の上に身震いをしながら立ち，空の星たちに堂々とした自分の姿を披露するかのように空を見渡す。それから，そのまま沼に沈んでいく

④　河童が沼に沈んで行ったので，唄を歌う者はいなくなり，大河童沼は静けさを取り戻した。沼の底から泡がいくつか上がってきたことからも，河童が沼の底に沈んでいったことが分かる。また，沼に映った月には，クレーター（兎と杵の休火山）がはっきり映るほど，水面は揺れ一つない状態であることが分かる。そして，この沼には今，水面に映る月のみが存在している

⑤　すべてを見ていた蛙が最後に「ぐぶう」と鳴いて，この河童のショーは幕を下ろす

上記のような時間軸で進んでいく中で，徐々に水面に上がっていき，最終的には河童が沼に沈んでいく上下の動き，河童のテンションが③でマックスになる様子，月が河童の動きを細かく描写していることなどが，この詩の解釈として考えられます。また，最後にだけ登場する蛙の役割についても，実は河童ではなく，蛙が主人公であるという読みも考えられます。すべてを冷静に，客観的に静観している蛙こそ，この時間と空間の支配者であると考えられるからです。

また，この項の冒頭で述べた，「るんるん　るるんぶ　るるんぶ　るるん　つんつん　つるんぶ　つるんぶつるん」という唄も，河童の動きを強調する働きがあると言えるでしょう。

(4) 群読の魅力

群読とは「一人ないし、複数の読み手で音声表現する」ことです。複数（集団）読みを取り入れることによって，音声表現に奥行と厚みが構成されるため、立体的な読み声として伝えられます。

また，作成者間の対話の必要性が生まれ，多様な詩の解釈を共有したり，批判し合ったりする場として活用でき，作品を読み深める手段としても取り入れられています。そして，どのように工夫すれば詩の解釈を聞き手により伝えられるのかを追求していくなかで，作品の演出づくりを楽しみながら活動できることも魅力です。

(5) 本題材で味わう国語科ならではの文化

今回，上記で述べたような「河童と蛙」の解釈に，仲間の解釈や第三者に伝えるという視点が加わることで，より詩の解釈を深められるのではないかと考えました。

そこで，本題材において子どもたちが味わう「国語科ならではの文化」とは，詩の解釈を深めるために，「河童と蛙」の群読台本を作成する中で，仲間と根拠をもって解釈を伝え合うこととします。

４人グループでの群読台本の作成では，仲間と根拠をもって創りあげた詩の解釈を，群読する際の演出に反映させていく子どもたちの姿が見られるでしょう。さらに，詩の解釈から群読をどのように演出するかという視点が加わることで，個人で解釈した詩の世界はより重厚感を増し，多様性に富んだ表現が期待できます。

それぞれの子どもたちが詩への理解を深め，創造力や感受性を働かせながら，詩の世界を広げる営みを体感できればと考えています。

(6) 題材と子どもたち

本題材は，擬態語と擬音語が繰り返しリズミカルに表され，音読する楽しさを感じることができる詩です。河童の唄，踊りを想起させる跳ねるようなリズム，水の上に立ったときの河童の高揚感，沼に沈んで静寂を取り戻す場面，その静寂を裏切る蛙の一声など，群読で表現するための工夫の余地が多くあります。また，個人の音読とは違い，４人グループによる群読では，演出方法を考える過程で，詩の解釈の広がりが期待できます。子どもたちは，詩の言葉に戻りながら，どうすればこの詩の世界が表現できるのかを仲間と共に考えるでしょう。

その際，実際に声に出したり，身振り手振りで表現したりする子どもたちがいるかもしれません。その際には，そうした姿を価値づけて，広げていきたいと考えています。

草野心平が思い描いた詩の情景を再現することと，群読を工夫していくことは切り離せません。「どのようにしたらよりよい群読になるのか」という問いが，子どもたちの中から生まれ，その都度詩の言葉と向き合いながら，詩の世界に対する読みを深めていく姿を期待しています。

参考資料：草野心平(1928)「第百階級」(1954)「詩と詩人」
：草野心平記念文学館編集「いわき市立草野心平記念文学館　資料」
：井出祐介（2018)「草野心平の校歌展による考察」：カジ（2018)「書きかじり　かじり書き」
参考文献：教育出版『伝え合う国語　中学国語１』：光村図書『国語　１』

６　新学習指導要領との関連

Ａ　話すこと・聞くこと

ウ　相手の反応を踏まえながら，自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫すること。

エ　必要に応じて記録したり質問したりしながら話の内容を捉え，共通点や相違点などを踏まえて，自分の考えをまとめること。

Ｃ　読むこと

イ　場面の展開や登場人物の相互関係，心情の変化などについて，描写を基に捉えること。

エ　文章の構成や展開，表現の効果について，根拠を明確にして考えること。

７　題材構想　（全５時間）

（１）「のはらうた」４作品を音読し，個人で選んだ詩をどのように音読するのか考える（１時間）
（２）　音読の工夫の根拠を明らかにする（１時間）
（３）「河童と蛙」の解釈を個人で行う（１時間）
（４）　個人で考えた詩の解釈をもとに，４人グループで交流し群読発表用の台本をする（１時間本時）
（５）　群読の発表会　振り返り（１時間）

(1)「のはらうた」４作品を音読し，個人で選んだ詩をどのように音読するのか考える（1時間）

この題材における詩の出会いとして，「のはらうた」を提示します。工藤直子さんの詩集「のはらうた」から，教科書に載っている４作品を提示し，４作品の音読を開始します。その中から，１作品を選びその詩の解釈をしていきます。４編ともひらがなで表現され，擬人化された主人公である「たんぽぽのわたげ」「かまきり」「のぎく」「けやき」の心情が表現されています。子どもたちは，音読していく中でなぜその作品を選んだのかや，自分が気に入った表現を口々につぶやくでしょう。

「あしたこそ」
・希望に満ちたイメージがある
・「とんでいこう　どこまでも」が倒置になっていて，より遠くというわたげの意思が伝わってくる
「おれはかまきり」
・自信満々なかまきりの様子
・どきどきするほど心も鎌もひかってるって生命力に満ちあふれている
「あきのひ」
・夏が終わり，秋の涼しさが心地よい
・ゆうひがくるくると沈むというところから，日が短くなっている
「いのち」
・葉が落ちてしまっても，鳥たちが葉っぱの代わりをしてくれているからさみしくない
・よいのであるという表現がとても力強い
など

次に，自分が選んだ詩をワークシートに書き写し，言葉に着目して音読の台本をつくっていきます。その際の視点は，子どもたちとつくっていきたいと思います。

視点
・声の強弱
・間をあける
・スピードの変化
・音楽でいうクレッシェンドとデクレッシェンド
・単語の切り方
など

これらの視点は，「河童と蛙」の群読台本の視点にも生かしていきます。

また，ワークシートにはどうしてそのように読むのかも記入していきます。本時は，音読発表に備えて準備を進めて，次回につなげて終わります。

(2) 音読の工夫の根拠を明らかにする（１時間）

全体で音読を聞き合い，伝わった工夫について，どうしてそのように読んだのかを聞き合う時間を設けます。もし工夫した部分が聞き手に伝わらなかった場合には，発表者から工夫点を説明し，その根拠も伝えていきます。音読の巧みさも評価すべきですが，それ以上に「どうしてそのように読んだのか」という根拠を詩の中から見いだし，解釈を広げることを重視ししているためです。以下に，子どもたちの工夫点と根拠を示します。

聞き手	発表者
・「とんでいこう」と「どこまでも」の間に間が開いていた ・文末の「ぜ」に力	・どこまでもというわたげの決意を表現したかった ・かまきりの自信満々

を込めていた

・「くるくると」が他の言葉よりも早かった

・「よいのである」をゆっくりと力強く読んでいた

など

な様子を表現したかった

・秋になり，夏よりも日が沈む時間が早くなったことを伝えたかった

・枯れてしまっても，春に向けて生きていくという決意

など

子どもたちが「伝えること」と「解釈すること」をつなげて考えていくために，どうしてそう読むのかの根拠を問い直していくことを，本題材では大切にしていきます。

(3) 「河童と蛙」の解釈を個人で行う（１時間目）

４人グループの群読を行っていくことを伝え，草野心平の「河童と蛙」を提示し，まずは各自で自由に音読します。

次に，読んでいて気になる表現を子どもたちに聞きます。

・「るんるん　るるんぶ　るるんぶ　るるん　つんつん　つるんぶ　つるんぶ　つるん」がおもしろい
・「月もじゃぼじゃぼ沸いている」とはどういう状況なのか
・河童はどこに行ってしまったのか
・最後に出てくる蛙の存在が気になる

など

そして「この詩を，どのように解釈し，それをどうやって群読で聞き手に伝えるのか」という問いを子どもたちに示し，「河童と蛙」の世界を個人で解釈し，ワークシートにメモしていきます。その中で，周囲の仲間と交流して解釈を聞き合ったり，疑問点を解決しあいながら取り組む姿，演出にまで考えをもつ子どもの姿にも期待します。

個人追求用のワークシートを以下に示します。

詩の解釈	【　詩　】
河童の皿に映る月が揺れ動くほど，河童は水面から顔だけ出して，はしゃいでいる様子	るんるん　るるんぶ　るるんぶ　るるん つんつん　つるんぶ　つるんぶ　つるん 河童の皿を月すべり。 じゃぶじゃぶ水をじゃぶつかせ。 かおだけ出して。 踊ってる。
顔だけだから，あたりを気にしている	るんるん　るるんぶ　るるんぶ　るるん つんつん　つるんぶ　つるんぶ　つるん 大河童沼のぐるりの山は。 ぐるりの山は息をのみ。 あしだの手だのふりまわし。 月もじゃぼじゃぼ沸いている。
全身（足や手）を使ってはしゃぐ河童。その激しさは，水面に映った月が，煮えたぎった熱湯 のように沸いているという表現から分かる	るんるん　るるんぶ　るるんぶ　るるん つんつん　つるんぶ　つるんぶ　つるん 立った。立った。水の上。 河童がいきなりぶるるっとたち。 天のあたりをねめまわし。 それから。そのまま。
水中にいたはずの河童は，水の上に身震いをしながら立ち，空の星たちに堂々とした自分の姿を披露するかのように空を見渡す。それから，そのまま沼に沈んでいく	るんるん　るるんぶ　るるんぶ　るるん つんつん　つるんぶ　つるんぶ　つるん もうその唄もきこえない。 沼の底から泡がいくつかあがってきた。 兎と杵の休火山などもはっきり映し。 月だけひとり。 動かない。
沼の底から泡がいくつか上がって　きたことからも，河童が沼の底に沈んでいったことが分かる。また，沼に映った月に　は，クレーター（兎と杵の休火山）がはっきり映るほど，水面は揺れ一つない状態であることが分かる	ぐぶうと一声。 蛙がないた。
試合終了の合図	

(4) 個人で考えた詩の解釈をもとに，４人グループで交流し群読発表用の台本をする（１時間　本時）

本時は，４人グループで群読台本の作成に取り掛かります。子どもたちが作成する群読台本は以下に示します。

【　群読台本　】	メモ	演出ノート
るんるん　るるんぶ　るるんぶ　るるん つんつん　つるんぶ　つるんぶ　つるん 河童の皿を月すべり。 じゃぶじゃぶ水をじゃぶつかせ。 かおだけ出して。 踊ってる。 声小	・はしゃいでいる様子	河童役　土肥　音読は途中２人から３人へ ２人（井出・髙橋） すべりだから，早く読む じゃぶじゃぶとじゃぼじゃぼは対比 手を動かす 実際に踊る
るんるん　るるんぶ　るるんぶ　るるん つんつん　つるんぶ　つるんぶ　つるん 大河童沼のぐるりの山は。 ぐるりの山は息をのみ。 あしだの手だのふりまわし。 月もじゃぼじゃぼ沸いている。 声中	・ぐるりの山が河童に驚く様子を表現	山役　井出 ぐるりを手で表現 ぐるりの山役の人は実際に息をのむ 土肥は足と手をふりまわす 息をのみ終わったら，音読班に合流 足と手を振り回す
るんるん　るるんぶ　るるんぶ　るるん つんつん　つるんぶ　つるんぶ　つるん 立った。立った。水の上。 河童がいきなりぶるるっとたち。 天のあたりをねめまわし。 それから。そのまま。 声大	・煮えたぎった熱湯のように沸いている	３人で大きな声で 最初の立ったより，後の立ったを大きく 強調して言う 河童役は立って，天のあたりをにらむ そのままは，沼の底に戻っていく転換点 だから，４人で読む ここからは一人で表現＊レオ風で（梶山）
るんるん　るるんぶ　るるんぶ　るるん つんつん　つるんぶ　つるんぶ　つるん もうその唄もきこえない。 沼の底から泡がいくつかあがってきた。 兎と杵の休火山などもはっきり映し。 月だけひとり。 動かない。 ぐぶうと一声。 蛙がないた。	・空の星たちに堂々とした自分の姿を披露するかのように空を見渡す ・水面は揺れ一つない状態であることが分かる。 ・試合終了の合図 など	沼の底から（間）泡がいくつか（間） はっきりは，はっきりと言う 全員動かない 河童役の土肥は蛙の「ぐぶう」を言う 蛙も主役の一人だから など

机間支援をする中で，群読台本や演出ノートに書かれた内容に対し，「どうしてこういう演出にしたのか」などを尋ねて，根拠の所在を明らかにしていきます。

また，同じ詩の言葉を根拠にしても解釈が違ったとき，なぜそういう解釈に至ったのかを伝え合い，自分の考えを確かなものにしたり，仲間の解釈に納得して新しい詩の世界を構築したりする場としていきます。その際，実際に声に出したり，身振り手振りで表現したりする子どももいるかもしれません。

こうしたことを繰り返しながら，群読の演出の工夫を通して，詩の解釈を深めていくことを期待します。

(6) 群読の発表会　振り返り（１時間）

本時の発表会では，全員発表ではなく，やりたいグループが発表していく形式をとりたいと思います。群読発表では，それぞれが伝えたい詩の解釈が，演出の工夫とつながっているのかを講評の基準にしていきます。

また，その後この題材を振り返り，各自がこの題材を通して感じたことをワークシートにまとめて，本題材を閉じたいと思います。

最後に，どのような振り返りが書かれるのかを示します。

・グループで河童の動きや，周囲の状況を絵で表現してくれたため，整理ができた
・群読の配役を決める際，河童の躍動感を表現するために，身振り手振りで表現する方法がとてもよかった。また，蛙の一声をたっぷり間を開けたことで，蛙のこの詩での役割が分かりやすかった
・同じ表現に注目しても，グループの仲間と解釈が違うことに驚いた。でも，理由を聞くと，その解釈の方がこの詩の世界にはふさわしいと感じた
・個人の解釈の時は蛙がたくさんいて，「るんるん　るるんぶ　るるんぶ　るるんつんつん　つるんぶ　つるんぶ　つるん」と歌っていて，その唄に合わせて河童が踊っていると考えていたが，「もうその唄もきこえない」という場面で，河童は沼の底に帰っていたのだという解釈を聞き，河童が歌っていたという解釈に納得し，蛙の配役が一人になった
・詩の世界を解釈することと，表現することのつながりを見いだすことが難しかったがグループで解釈を共有したり，台本を作成する中で，個人で描いていた詩の世界が広がったったりした

など